

令和元年度 旧宇和島管内 生徒指導夏季研修会 実施報告書

1 日 時 令和元年8月4日(日) 13:10~14:30

2 場 所 西予市歴史文化博物館

3 講演内容

- ・ 演 題 「子どもの問題行動とその背景」～ いじめ問題を考える ～
- ・ 講 師 愛媛大学名誉教授 放送大学客員教授 平松 義樹 氏

(1) 講演の概要

なぜ人はいじめをするのか。なぜ人はいじめをやめられないのか。
この問いに対して家庭の問題と学校の問題を考える。

ア 4つの内容

- (ア) 子どもの質的变化とその背景
- (イ) いじめが起こるメカニズム、シャードンフロイデ(妬み)
- (ウ) 家庭の問題(マルトリートメント)
- (エ) 学校の問題

イ 覚えてほしいキーワード

- (ア) シャードンフロイデ
- (イ) マルトリートメント
- (ウ) チーミング(アクティブな学校組織)



<写真1 講演の様子>

(2) 子どもの質的变化とその背景

ア 子どもの質的变化

- (ア) 子どもに広がる「新しい荒れ」…自虐性と攻撃性

以前と比べて、子どもの自虐性と攻撃性がエスカレートしている。「むかつく」、「きれる」と表現し、他者を寄せ付けようとしない。

自虐性とは、例えばリストカットが挙げられる。厚生労働省の調査では、20代前半までの女性の7人に1人は手首を切った経験がある。血が流れているのを見てやっと生きている実感を持つそうである。また、中学校2年生で14人に1人が同じような経験がある。ということは、クラスに1、2人の生徒が、リストカットの経験があり、今苦しんでいる。そういう世界があることを認識しなければならない。

攻撃性のエスカレートとは、相手の命がなくなるまで攻撃をすることである。友人の動物学者の話によると犬同士の喧嘩は、どちらかが腹を見せると攻撃をしなくなるが、人間は相手の命がなくなるまで攻撃してしまう。

- (イ) 学びや学校から逃走する子どもたち

学校は、どうしても生徒を序列や選別してしまう傾向がある。ペーパーテストが良いと、あたかも人間性が良いように見られる。その評価に対して、閉口したり拒否したりする子どもたちが出てくる。

- (ウ) 消費文化に巻き込まれる子どもたち

子どもたちは、ゲーム、スマホ、ネット等々の消費文化に巻き込まれている。人間的なつながりや体験的な活動がない。放課後に子どもたちが遊ぶにしても、ゲーム機を使ってであり、子どもたちが野外で遊びまわっていた光景を見なくなった。

(エ) 自己有用感と将来への希望を持たない子どもたち (が多くなっている)

自尊感情とは、自分にもいろいろなことができるという感情である。今の子どもたちには、自分は誰かの役に立てると意識を育てることが大切である。学校でも家庭でも必要とされると感じている子どもを育てていく。

イ 他者を無化すること

今の子どもたちは、一見すると自己中心的で何事も恐れられないような存在であるように見えるが、他者を無化することで自分を必死に守っている。

(ア) 排除

排除とは、「むかつく」、「うざい」、「きもい」などの言葉により、他者を認めないことで無化する行為である。

(イ) 内閉

引きこもり、ニートなどと言われる。他者との関りを自ら断ち切って、自分の世界を守ろうとすることで他者を無化している。

(ウ) 迎合

表面的には他者と仲良くしているように見えるのだが、自分の考えを言えない。自分の気持ちを友達の基準に合わせることで、他者を無化している。

(エ) 同調

迎合が 1 対 1 の関係であるのに対して、同調とは周囲のみんなと歩調を合わせることで、集団の中で自らの存在を無化することにより、他者に傷つけられることを防ぐ手段である。

(オ) 風景化

風景化とは、周りに存在する他者を他者として認知しないで、山や川のような風景と見なすことによって周囲の他者から傷つけられることを避ける。

ウ 特に留意する社会変化

文部科学省が、子どもに接するとき特に留意する社会変化として、(ア)～(オ)のようなことを挙げている。

(ア) 社会規範の流動化・弱体化、価値観の多様性

(イ) 日本的な共同社会の変質、地域の間人関係の希薄化

(ウ) 親の孤立、家庭の養育力・教育力の低下

(エ) 子どもの生活体験、自然体験等の機会の減少

(オ) テレビ、携帯電話、インターネット情報等のメディアの普及

エ 現代のいじめ

現代のいじめは、エスカレート、陰湿化、流動性、集団化のキーワードで説明ができる。

いじめを起こす心理は、6つだと言われている。

(図 1 参照)

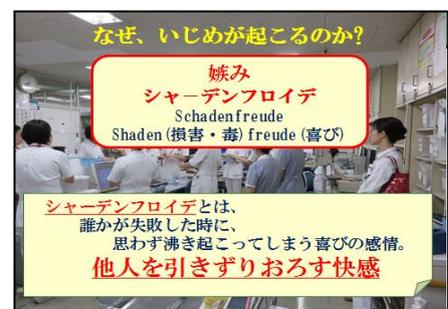
(3) いじめが起こるメカニズム

ア シャーデンフロイデ (Schadenfreude=嫉み)

学級には、同じような(類似性)子どもたちがいる。学習したり、特別活動をしたりすることなどによって人間関係が構築されていく。その中で、自分たちでも、少し頑張ればできるかもしれないという(獲得可能性)気持ちを持つ。その気持ちが、自分より評価された相手をうらやま

「いじめの心理」	
(1) 単純な遊び・ふざけのエスカレート (面白半分)	
(2) 欲求不満 (うっぶん晴らし)	
(3) 劣等感の補償	
(4) 親や教師への注意獲得行動	
(5) 攻撃モデルの模倣 (体罰教師・テレビ等)	
(6) 異質性の排除 (横一線、没個性)	

<図 1 6つのいじめを起こす心理>



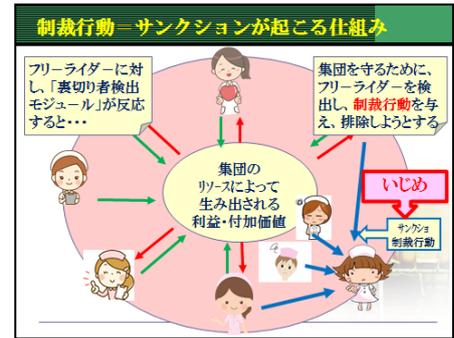
<図 2 シャーデンフロイデ説明>

しく思うだけで済まないで、嫉みが生まれる。

やがて他人を引きずり下ろす快感であるシャードエンプロイデが起こってしまう。

イ 制裁（サンクション）

学級の関係は、自分の時間やエネルギー（リソース）を提供して、そこで得られる利益を自分の学びとしている。自分のリソースを提供しない人物をフリーライダーという。自分のリソースを出さず、集団からの利益を受けるため、フリーライダーを野放しにしていると集団が崩壊してしまう可能性がある。そのため、フリーライダーを何とか制御しようとする行為の一つがいじめである。制裁は、集団が壊れないための行為であり、いろいろな組織の中に制裁がある。

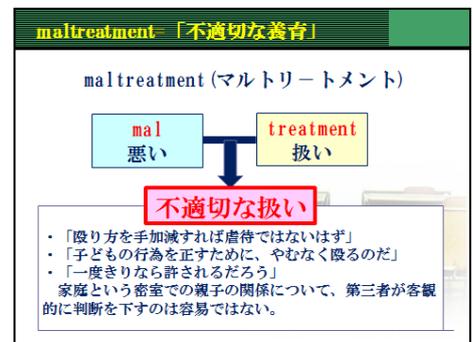


<図3 制裁の起こる仕組み>

(4) 家庭の問題(マルトリートメント)

児童虐待の向こうに、家庭が抱える複雑な困難がある。養育者や子どもの障害や疾病、不安定な就労状況、家庭内不和や近隣とのトラブルなどの問題が複合的に影響して、児童虐待という状況になっている。

虐待をした親は必ず、「虐待していません。」と言う。虐待という言葉は、上の立場から一方的に行っている感覚を持つため、マルトリートメント（不適切な養育）という言葉を用いる。(図4参照) 殴り方を手加減しても、子どもの行為を治すために殴っても一度だけでもマルトリートメントである。



<図4 マルトリートメントの説明>

マルトリートメントは、子どもの脳の成長を阻害する。

強者である大人から弱者である子どもへの罵倒、威嚇、無視、脅し、子どもの前で繰り広げられる激しい夫婦喧嘩すべて、マルトリートメントとなる。3歳から5歳の時にマルトリートメントをしている家庭は、子どもの記憶や感情をつかさどる海馬が発達しない。9歳から10歳の時にマルトリートメントをしていると、右脳と左脳をつなぐ脳梁が成長しない。14歳から16歳の時にマルトリートメントをしていると、思考や行動をつかさどる前頭前野が発達しない。

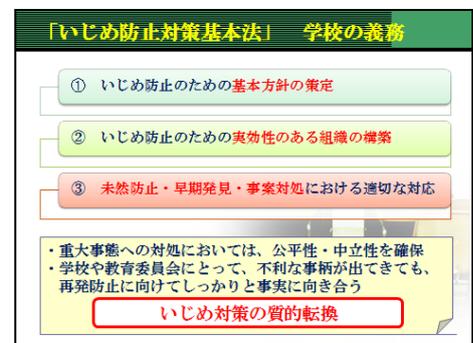
幼児期に十分なアタッチメントができずマルトリートメントをしていると、子どもは自己概念の形成ができず、重大な問題が生じてくる。

「体罰をしていません。」と親は必ず言うが、「不適切な養育をしていませんか。」と訴えかけていく必要がある。

(5) 学校の問題

ア ルーズカップリング理論

文部科学省のいじめ対策協議会で話されている内容には、認知、異議、組織、早期発見、定義、連携等の言葉が何度も出てくる。その中で学校の義務として、①いじめ防止のための基本方針の策定、②いじめ防止のための実効性のある組織の構築、③未然防止・早期発見・事案処理における適切な対応があり、この3つを守るように教育委員会も指導している。(図5参照)



<図5 学校の義務>

判例の中では、それ以外にも多くの義務が学校にあるとされている。裁判になれば、この義務

の違反で教師が処罰される。いじめの本質を理解する義務が教師にはあり、いじめの全容解明努力義務が学校に課せられている。保護者に対する報告共有義務も教師に課せられている。

いじめで自殺があった場合、組織作り、気付きの問題、情報共有の問題、対応の仕方などに関する学校の対応が問われるが、中でも組織の問題が大きい。いじめ防止対策推進法が策定されて以後の亡くなった子どもたちへの対応では、情報共有の不足、管理職へ未報告等、組織的に共有された形跡が乏しかった。

組織で対応しにくい理由の一つは、これまでの学校は、学級担任が自分のクラスに責任を持って対応してきたことにある。これをルーズカップリング理論と言う。学校では予測できないことが多い。そのときに教師、一人一人の専門的裁量の保証と柔軟な対応でこれまでの教育は行われていた。いわゆるあまり強くない組織でも対応していった。しかし、ルーズカップリング理論には学校の組織を弱くする面があり、個別拡散的な教育活動を常態化させる。うちのクラスの問題だから余計なことを言ってくれるなという理論が成立してしまう。

最近では、学校のマネジメントや校長のリーダーシップを重要視するのは、教職員個人で問題を抱え込まずに、すべての当該組織に報告相談し、当該組織を中核とし、組織で対応することが大切だからである。

イ 「いじめ」と学級担任の関連性

(ア) ご機嫌な学級

いじめが起こりにくい学級を作るために、教師はいじめに対する敏感さを磨く必要がある。また、教師そのものがストレッサーになっていないか反省する。いじめが起きやすい教室といじめが起きにくい教室では、明らかに人間関係が違っている。教師が体罰をふるうことによって、子どもに対して暴力や制裁にGOサインを出していることはないか。正義を口実にすれば、特定の子に対しての暴力行為は、子どもの世界に懲らしめの連鎖を作りあげる。体罰をふるう教師は、普段から厳しい指導をする傾向がある。その教師そのものがストレスの要因になっている。

分かる楽しい授業をしているかどうか、子どもの多様性や自由度を保証しているかどうか。これらのことを、振り返る必要がある。

(イ) マウンティング

4月には、子どもたちの人間関係は、フラットであったが、5月、6月にかけてマウンティングが起こってくる。いじめが起こるのが多いのは6月である。マウンティングというのは、人間関係上どちらが優位なのかを探りながら、立場の安全性、安定性を確保していくのが目的である。4月は、互いに名前を知っている程度の人間関係であり、マウンティングは起こらない。生活の中で下位に位置付けられた子どもが、いじめの対象となってエスカレートしていく。日常のささいなコミュニケーションの中から、マウンティングが子どもたちの中で展開しているのかを観察して、見える教師になる必要がある。

(ウ) ラベリング

あの子は、「いじめられていい存在である。」「他の人より劣っている。」などと、ラベルを貼り、ターゲットにしてしまう。ほかの子どもたちの前で叱責されたり、辱めを受けたりしていると、みんなからあざ笑われる。子どもの自尊心を傷つけていないか。教師がみんなの前で辱めていないか。あの子は「怒られていい存在なんだ。」というラベリングをしていないか。こういうことを振り返られる教師であってほしいと思う。

(エ) 漂流理論

人間は完全に善悪に染まるのではなく、常に、不安定に善悪の価値観が漂流している。自分が悪かもしれないと思ったときに、善の方に行きたいという中和や言い訳のテクニックを人間は持っている。いじめの加害者は、「これはいじめではなくふざけていただけです。」「この子が

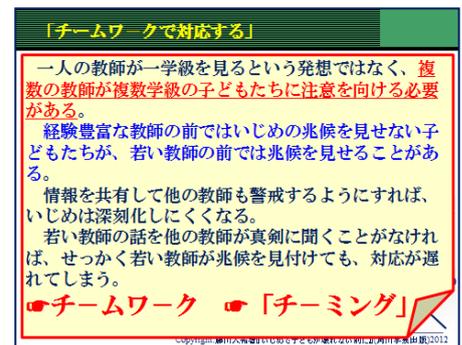
生意気なので懲らしめていただけです。」「クラスの雰囲気や乱す者は、いけないんです。」と、必ず言い訳をする。いじめの子のそういった技術を知っておけば、加害行為に上手く介入することができる。ぜひこの理論を学んでほしい。

(4) IPS 秩序

教室や職場などの集団において、一般の社会とは異なる圧力や雰囲気が生じ、それが全体化するを同調圧力という。その集団に入ると一般とは違うこの集団だけの常識が、同調圧力を加えている。同調圧力は、相互監視の雰囲気や個人の行動を操作する。そうした体験は、個人の内面に変化を与え、それがさらに集団の雰囲気を変える。このような循環で差が出てくることを IPS 秩序という。いじめの加害者への対応は大事だが、集団の同調圧力を生じさせる中間集団がどっちを向いているかを見ておく必要がある。

ウ チーミング

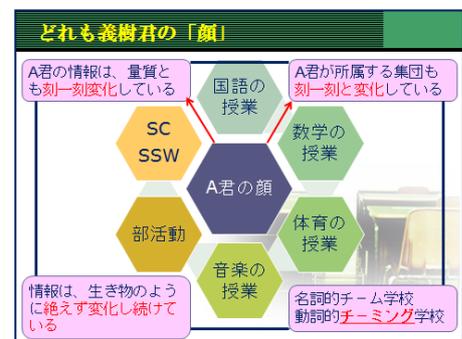
教師の仕事では、感情が成果に大きな影響を表すことが多い。いろいろな特色を持つ教師が、一緒にできる生徒指導を考える必要がある。それが、チーミングである。(図6参照)人はいろいろな顔を持っている。(図7参照)国語の授業の顔も数学の授業の顔もどれも義樹君の顔だが、顔は刻一刻と変化している。そのため、チームではなくチーミングで対応する。新たなアイデアを生み、答えを探し、問題解決できる専門家たちの働き方がチーミングである。また、率直に意見を言う、共働する、試みる、生産する、一人が得た情報をみんなで共有化するのがチーミングである。



<図6 チームからチーミングへ>

エ シェルター・スイッチャー

いじめでは、周りではやし立てている学級集団の特殊性の問題が大きい。さらには、その学校の経営方針が、競争を過度に実施させ、動揺を増大させ、ストレスを溜めるものである場合は、学級担任にストレスが溜まって、学級の生徒にプレッシャーを与えてしまう。その状況で、子どもに「いじめの仲裁者になれよ。」というのは無理がある。教師に報告をすれば子どもの世界では、「だれがチクったんだ。」ということになる。今、子どもたちにしてあげられるのは、シェルターとして、「自分はいじめには加担していないから、安心してね。」という言葉投げかける人物である。あるいはスイッチャーとして、いじめが起こりそうな場面になりかけたら、その場の雰囲気を変えたり、違う話題を提供したりする人物である。この二つの役割であれば、子どもたちは引き受けてくれるかもしれない。そういう役割のできる生徒がいる学級が求められている。



<図7 人の持つ様々な顔>

(6) 終わりに

シャーデンフロイデやいじめの問題は、どの世界にもどの組織にも起こる。それに対して、命を失う子どもたちがいるという現実を見極めて、学校は一生懸命に取り組んでいる。それでもいじめは起きてしまう。その背景として、家庭の問題や地域の問題などの様々な問題が絡み合っている。ぜひ、皆がそれぞれの立場で率直に話し合うことによって、尊い日本の子どもたちの命を救うことを望む。